

COVID-19禍における、大学と小学校三校合同による音楽科交流授業

森下修次・米山陽子¹・平出久美子²・埴丈昌³・

首藤雅子³・伊野義博⁴・田中幸治

1. COVID-19禍では何が起きたか

2019年12月、中国武漢で未知のウイルスが発見され、2020年には瞬く間に我が国を含む世界中で猛威を振るい始め、形状が従来型のウイルスにも存在するコロナ形状のため、新型コロナウイルスと呼ばれているが、ここでは正式名称のCOVID-19と呼ぶことにする。

2020年3月には、大学等を含む日本中の全ての学校が休校を余儀なくされた。5月頃には徐々に授業が再開されるようになったが、ほとんどの大学では遠隔会議システムを用いた非面接授業で行うこととなった。世界的に広まったCOVID-19は、2020年ドイツなどの合唱でクラスター、いわゆる集団感染が発生した。それらの事例を受け、学校再開後も合唱授業は原則禁止の通達がされた。また、リコーダーを含む楽器も感染源である飛沫を危惧されたが、楽器メーカー等の研究により飛沫は限定的であることが証明されている。いずれにしても2022年現在、COVID-19禍は続いており、日本全体の社会生活に大きな影を落としている。

さて、本稿で対象とするのは、新潟大学教育学部音楽教育専修の学生向けに開講されている課題解決実践型授業「音楽教育実践入門」及び「音楽教育実践」である。本授業は、1年生から4年生まで参加できる学年縦割りの選択科目であり、教員養成段階において求められる実践的指導力の育成を目指すものである。

授業のねらいは、小中学校等教育現場での音楽教

育活動の企画、運営を通して、音楽教師にとって必要な実践的指導力を総合的に育成することにある。その特徴は、小中学校等の教育現場の音楽教育活動について、現場教師と協働し、学生が主体となって企画、運営することにある。教材開発、教材研究、音楽活動の組織、授業や演奏会の企画、学校との連絡・交渉、子どもの実態把握と交流、コミュニケーションや協働的な学びの方法等について、体験を通して総合的に学び、音楽教師として必要となる基礎的な力を身に付けることにある。

ここ数年は、教育学部に近い新潟市立内野小学校の協力を得て、一つのテーマのもと、対象学年のそれぞれのクラスに対して音楽授業を計画、立案、実践し、それらをつなげ、一つのストーリーとして統合し、全校児童の前で学生とともに音楽発表をする形態を採っていた。しかしながら、COVID-19禍のもと、こうした活動ができなくなった。特に音楽科においては、それまで当たり前のように行ってきた、共に歌うこと、演奏することがきわめて困難となり、ましてや学生が集団で直接学校に訪問して音楽活動を行うことは不可能な状況となった。

本稿では、COVID-19禍において、学生と大学教員、そして附属学校をはじめとする現場の教員がどのようにして音楽教育活動を継続し、合同による音楽科交流授業として新たな実践を開発してきたのかについて、2020年と2021年の2年間の軌跡を記述する。このことにより、予測できない状況下における音楽教育活動実践の方向性、大学と教育現場との協働のあり方、ICTを活用した音楽教育実践の方法、大学のみならず複数の学校同士を結ぶ新たな授業の開発、そして本実践を通じた学生と児童の学びと成長の姿が明らかになるだろう。

2021.10.25 受理

¹ 新潟大学附属新潟小学校

² 新潟大学附属長岡小学校

³ 佐渡市立金井小学校

⁴ 新潟大学名誉教授

2. 2020年の活動

2020年の活動は、「多様性」をコンセプトとし、2019年10月時点では、ロシア、イタリア、ヨーデル、アフリカ、日本などの国や地域の音楽を教材とすることとなった。本授業のリーダーとなる3年生（10月時点では2年生）は、それぞれ担当グループを決定するとともに、専門家への指導依頼、ワークショップの実施を計画すると同時に小学校での授業計画立案を進めていた。同時にこれらの実践について、協力校である新潟市立内野小学校と連絡を取りながら、2020年7月の実施を目指していた。2019年12月時点では、ロシアの「ヴァーリンカ」の歌と踊り、新潟市内野の内野盆踊りの歌、演奏、踊り、イタリアの「フニクリ・フニクラ」の歌唱、そしてヨーデル「にわたりのヨーデル」の学生演奏と児童の歌、アフリカのジェンベの演奏と踊りの体験、全体合唱「ふるさと」（後に「WAになっておどろう」に変更）といった概要ができあがっていた。2020年1月7日には、内野小学校との打ち合わせを実施、大枠を承諾していただくとともに、事前授業、リハーサル、本番の日程打ち合わせをしている。専門家による学生自身のワークショップの計画も進み、例えば、ヨーデルの場合は3月5日に東京より、ロシアの歌「ヴァーリンカ」の場合は3月16日に新潟在住のロシア人を講師として招聘し、新潟大学にてレッスンを受けることも決定した。

こうした中で、深刻な問題として浮上してきたのがCOVID-19であった。2月28日、大学の教育・学生支援担当理事名で、「新型コロナウイルス感染拡大に伴う学外実習等の自粛について（通知）」が出され、これ以降例年の活動は大きく制限されることとなる。2020年の前期授業が基本的に非対面となったため、1、2年次生を含めた4月からの本授業も、ビデオ会議システムZoomによるオンラインで行われることとなる。この際、浮上した問題は、大きく次の2点であった。

1点目は大学において対面授業、対面レッスンができないことである。当初より遅れて始まった4月20日の第1回からZoomによる非対面の授業が開始される。初回は例年新1年生も交えた顔合わせと企画説明に当てていたが、顔を合わせた直接的な交流はできずに授業を進めざるを得なかった。訪問授業実施の前提として不可欠な学生の音楽学習も、東京から講師招聘は断念、新潟大学でのワークショップは中止となった。

2点目は小学校等を訪問し、児童との直接的な交

流をすることが不可能となったことである。児童との交流は本授業の中核であり、このままでは企画そのものが頓挫する可能性があった。苦慮の結果、児童との直接的な交流をあきらめ、それに伴い全体合唱も無くし、オンラインによる授業を模索する中、設備状況等の判断から新潟市立内野小学校との交流を断念、Zoomによる授業が可能な新潟大学附属新潟小学校との交流を検討、実現にむけて動くこととなる。幸いなことに、同校及び音楽科担当の米山陽子教諭の理解と協力を得て、初めてのオンライン授業が実践することとなった。

こうした状況下、本授業は、オンラインに加え、必要に応じて感染症対策をしながらの一部学生の対面学習を交えるハイブリッド体制となり、以後基本的にこうした形が継続されていく。学生は、Zoomのブレイクアウトルーム機能等を駆使し、オンライン上で授業計画を練り上げるとともに、初めてのZoomによる遠隔授業をどのように実践していくか、動画の編集、配信、児童の音楽体験の方法や交流の仕方等について様々に模索していくこととなった。

以上の経緯を経て、小学校での授業は、2021年9月1日及び9月4日、附属新潟小学校の4年1組、2組及び中学年3組（3、4年複式学級）を対象に実践された。学生は、イタリア班（フニクリ・フニクラ）、アフリカ班（ジェンベ）、ロシア班（ヴァーリンカ）、内野班（内野盆踊り）、ヨーデル班（にわたりのヨーデル）に分かれて授業を準備し、それぞれのクラスに以下のように配置された。各班の持ち時間20分の授業である。

表1 2020年の交流スケジュール

期日	学年・クラス	時間	担当・内容
9/1	4年1組	13:20-14:05	アフリカ班+内野班
9/1	中学年3組(3,4年複式学級)	14:10-14:55	イタリア班+交流
9/4	4年2組	11:20-12:05	ヨーデル班+ロシア班



写真1 画面上での発声師範と声の聴き取り（ヨーデル）



写真2 作成した動画教材ヨーデルとヴァーリンカ

このうち、ヨーデル班の展開は、以下のようなものであった。

表2 ヨーデル班の展開

ねらい：ヨーデルの歌い方を体験し、ヨーデルの呼びかけと普通の歌い方との違いについて知る。	
流れ(時間)	展開
導入 (5分)	○ヨーデルの音楽、背景について知る。 ・ヨーデルの音楽、背景について動画を流したりクイズを出したりする。 →画面共有でヨーデルの動画、ヨーデルの発祥地に関するクイズを提示、児童に答えてもらう。
展開① (10分)	○ヨーデルの発声で呼びかけ合いを行う。 ・発声の練習をした後に、ヨーデルの発声で、児童と学生の呼びかけ合いをする。 →例：児童が「ヨーウルー」と学生に向かって呼びかけ、呼びかけが聞こえたら学生は児童に向かって「ヨーウルー」などと返事をする。
展開② (5分)	○「にわたりのヨーデル」を歌唱する。 ・画面共有で「にわたりのヨーデル」を流し、動画に合わせて踊りながらサビの部分だけを歌唱する。

このような形の授業は初めてであったが、児童の反応が想像よりも良く、オンラインでも授業ができることが分かった。また、Zoomによる授業を考えたため、これまでは音楽表現を完成させることに意識がいきがちだったが、表現の工夫をしたり知識を得たりするための授業の構成を考えることができた。加えてスライドや動画編集など、リモートだからその教材作成が行え、ICTによる可能性を見いだした。

課題としては、動画の乱れや配信のタイミングの遅れ、音声の途切れ、動画とのタイムラグ、接続が途中で切れるなどのトラブルに対処する必要がある。対面でないことから身振りがうまく伝わらないことや、画面共有をしながらの授業では児童の反応が見えてこなく、それを体感できないこと、さらに児童の声を聞き、それに反応しながら授業を進めることがうまくいかないことがあげられる。

音楽の授業ではリモート授業においても音楽を中心とした授業をいかにできるか、いっそうの工夫が必要となった。

3. 2021年活動準備 音楽科学生の活動

2000年の活動が9月で終了し、同年10月から、来年の中心となる2年生12名が毎週月曜日を中心に話し合いや調査を行った。COVID-19禍がまだまだ続くことが予想されるため、2000年同様Zoomを活用した方法を模索することになった。

内容は、複数の学校を繋いで一堂に会しての授業ができないか、という案だった。話し合いの中で難易度が高くてやり遂げたいという意見が多く、今回の活動につながったと思われる。

また、様々な地域を結ぶのだから、その地域独自の音楽・芸能をという考えにまともっていくのは自然であった。

表3 活動案メモ (抜粋10～11月頃)

子供と一緒に演奏	授業の内容
対象：小学生 演奏 ↓ ex. マラカス ↓ 手作り楽器	Zoomで他地域とつながる。長岡甚句など自分の地域の音楽を学んで紹介しよう。 学生がプロデュース 海外とつながる。 →動画をとってもらおう。 その動画を使って授業する。私たちからも送る。どういう音楽があるか調べる。
パイプ マリンバの下 紙 ホース、マウスピース ↑ 簡単に作れるか どれくらいの音が出るか ↓ 設計図、細かいのを渡す まず学生が作成	学ぶこと→外国などの他地域の音楽を知り、自分の地域の音楽も知る。 雅楽(上越)：小学生が体験している(保存会)。 留学生に手伝ってもらおう。 新潟甚句：樽太鼓 長岡甚句 沖繩、北海道、徳島
目標	問題点
1.自分の地域の音楽を学ぶ 2.ほかの地域の音楽を学ぶ 3.学んだことを紹介しよう(自分の地域の音楽)	受け入れてくれる小学校の確保 佐渡とZoomをつなぐときに実際に行き全部の学校の日程を合わせる 音をきれいにとれる機材の確保

そういった話し合い等を経て行くうちに、次の方針で行くことになった。

- ①Zoomで複数校を繋ぐ
- ②地域は新潟、長岡、佐渡とし、主題とする地域の芸能は新潟甚句、長岡甚句、佐渡おけさとする。
- ③参加をお願いする学校は附属小学校(新潟・長岡)と附属校経験者の先生が在籍し、かつて卒業生の教員が佐渡おけさの指導を行っていた佐渡市立金井小学校とすることとした。

3月には佐渡おけさ(歌・踊り)、新潟甚句、長岡甚句それぞれの指導者に指導を受け、4月の本格始動を迎えることとなった。以下にその様子を示す(写真3～5)。



写真3 新潟甚句講習風景



写真4 佐渡おけさ(歌)Zoomでの講習(齊藤明里先生)



写真5 佐渡おけさ(踊り)講習

4月からは新たに新入生11名も加わり総勢32名の学生が新潟班、長岡班、佐渡班に分かれて活動することになった。4月19日時点の活動内容を表4に示す。

表4 4月19日の活動内容

	新潟班	長岡班	佐渡班
やったこと	・踊り・唄の練習 ・指導案作成 (クイズ作成)	・踊りの復習 (踊り中心) ・唄→五線譜 ・指導案の説明	・歌と踊りの練習 ・指導案の確認 ・クイズ作成
これからやること	・唄と踊りの復習 ・発問 ・クイズの作成	・唄・踊りの練習 ・指導案作成	・唄と踊りの練習 ・クイズ作成 ・具体的発問等

5月以降は表5のスケジュールで活動した。3つの班は、指導案、指導動画(パワーポイント)、音源録音(写真6)など、分担して作業を行った。また、それぞれの担当責任者(3年生)が、各校の担当教員とZoomで結んで、打ち合わせや指導を受けた。なお、金井小学校は島内の感染が限られていること、万が一の医療が脆弱であることなどから、1時間目の事前の授業もZoomを通して行われた(写真7)。附属新潟小学校と附属長岡小学校は1時間目の授業を担当の学生が訪れて行った。長岡小学校は7月9日に変更して行った。

なお、小学校では、大学が用意したビクタービデオカメラGZ-F270のHDMI出力をビデオキャプ

チャー クラシックプロCHD201でUSB出力に変換してパソコンに映像音声を送る方法で行った。三脚、パソコン、インターネットの接続は各学校の備品が使用された。

表5 5月以降の活動予定表

日付	1時間目	合同授業
5/17	各班で指導案を検討授業準備(パワポ、動画等)	改訂版指導案を提出→全体で共有、検討
5/24	授業準備、授業練習	授業準備(パワポ、動画)
5/31	1時間目の授業完成 教材作成も含めて→各班の授業を見せ合う。	
6/7	5/31の反省を生かして授業を改善	
6/14	授業準備	模擬授業(20分間)
6/15	金井小学校と打ち合わせ (Zoom)	
6/21	模擬授業①	模擬授業①
6/28	模擬授業②佐渡リハーサル	模擬授業②
7/2	1時間目 事前授業(佐渡)	
7/5	1時間目のリハーサル	
7/8	1時間目 事前指導(新潟・長岡)	
7/12		合同授業のリハーサル (Zoomをつないで行う。)
7/16		合同授業



写真6 音源収録風景

佐渡市立金井小学校での活動

佐渡市立金井小学校では、例年3年生が、総合的な学習の時間に地域の伝統芸能について追求する。これまでに、地域の民謡や鬼太鼓などの体験を単元の中心に据えて取り組んでいた。今年度は、新潟大学の音楽科の学生から、「新潟県ゆかりの伝統音楽である、新潟甚句、長岡甚句、佐渡おけさの3つの音楽を比較し、その固有性や共通性について比較したい」との申し出があり、この校合同授業に参加した。



写真7 金井小学校の授業送り出しとZoom画面

まず、Zoomで学生から佐渡おけさの歴史や人々の暮らしと歌詞の関係、唄い方についての授業を受け(写真7)、合同授業に向けて、歌と踊りの練習を行った。佐渡おけさには、とても多くの歌詞がある。事前授業前に、学生と担任とで、子供たちにとって身近な歌詞を選んでいため、愛着をもって歌うことができた。唄い方については、普段歌っている歌(西洋音階をもとにしたもの)と比較しながら指導するようにした。「今の唄い方は、こんなふうになっていたよ。」と、子供たちの唄い方を教師が真似して示し、修正点を伝えながら、民謡独特の節回しの感じをつかませるようにした。しかし、節回しを詳細に真似させようとすると難しいので、3年生の発達段階に合わせて、節回しの雰囲気を見せていればよいことにした。褒めながら何回も繰り返させることで、徐々に意欲をもって楽しみながら唄う子供が増えていった。新潟と長岡の子供たちとの出会いを楽しみに当日を迎えた。

附属新潟小学校での活動・指導

第4学年「地域の友達に伝えよう」～ほくらの新潟甚句～というテーマで4年1組、2組が活動を行った。

「新潟甚句」は、新潟盆踊りを源流として唄と踊りを整えられ、今日まで続いてきた郷土の民謡である。篠笛や三味線、子供たちが慣れ親しんできた樽太鼓が伴奏楽器として使われている。歌は40番近くまであり、当時の景色や人々の思いが七七七五調で歌われている。また甚句を特徴づける要素として、「アリヤサアリヤサ」の囃子言葉や、調子を合わせるための合いの手「イヨ」が入る。子供は、地声で伸びやかに歌うことを試す過程で、民謡独特の響きを味わい歌声の見方を広げることができる。

また、COFIV-19禍において、新潟まつりをはじめとした多くの祭りが開催できない状況にある。そんな中、オンラインを活用したり開催方法を工夫したりしながら郷土の音楽を守り続けている人々がいる。人はなぜそこまでして歌うのか。新潟甚句を教材として、子供に郷土の民謡の特徴やよさ、その音楽が果たす役割に気付かせたいと考え、指導計画を構想した。

指導計画は次の通りである(表6)。

表6 附属新潟小学校の指導計画

時	学習活動	子供の姿
1時間目	<p>【経験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「新潟甚句」を鑑賞し、気付いたことや感じたことを交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟甚句は、歌に伴奏楽器(篠笛・三味線・樽太鼓)が使われているね。 ・高い声を遠くに響かせるように歌っている。
2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ○佐渡・長岡・新潟をZoomでつなぎ、それぞれの地域に伝わる民謡と踊りを交流する。 ○新潟甚句の歌詞を変えた歌を提示し、歌詞の面白さを実感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの地域に伝わる民謡があるんだね。 ・地域によってお囃子の言葉が違っているね。 ・マスクのことを歌詞にして歌っているね。 ・新潟甚句の節に合わせて歌うと、今の事が民謡っぽく聞こえて何だかおもしろいね。 ・ほかの地域には、どんな民謡があるのかな。
3時間目	<p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ソーラン節と音戸の舟歌を比較聴取する。 ○新潟甚句が果たしてきた役割と特徴を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ソーラン節は、拍にのって力強く歌っている。ドッコイシの掛け声が入っている。 ・音戸の舟歌は、音が伸びて滑らかな感じ。 ・新潟甚句は、踊りのための歌。歌詞は即興で歌うことがあったんだね。
4時間目	<p>【再経験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生活の中で、新潟甚句の歌詞にしたいことを話し合う。 ○節と拍を提示し、言葉を当てはめたり歌って試したりしながら、歌詞をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟自慢の歌詞をつくって、甚句を歌おう。 ・わたしは、日本海の夕日を歌詞にしよう。 ・七七七五の言葉のリズムに当てはめてつくるといいんだね。 ・みんなの歌詞を合わせたら面白くなりそう。
5時間目	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽モデルを比較聴取し、どちらの歌い方で歌いたいか考える。 ○タブレット端末を使って、音楽モデルを再鑑賞し、思いに合った歌い方を選択する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「新潟甚句」は、民謡とロック風のどちらの歌い方が合うのか。 ・やっぱり民謡。最初のハアアは、声を揺らして歌うと民謡っぽさが出そう。 ・ロック風がいい。踊る人が楽しくなることが大事だから、テンポよく歌ってみたい。
6時間目	<ul style="list-style-type: none"> ○お囃子(笛)を提示し、使われている音を確認する。 ○グループのメンバーで歌・笛・お囃子をローテーションする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・5つの音で、できている。5音音階だ。 ・滑らかにリコーダーを吹くにはどうしたらよいのかな。 ・タンギングをしなくて吹くと、篠笛みたいに聞こえるよ。
7時間目	<p>【新たな価値の創造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○完成発表会を設定し、歌唱の特徴をワークシートに記述する。 <p>※11月に校内音楽祭で、「新潟甚句2021」を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・わたしたちのグループは、民謡の歌い方で歌った。出だしのハアアのところは、みんな声で揺らして、遠くに届けるイメージで歌った。合いの手は、歌と声の高さを変えて違いがわかるようにした。踊るために集まる人のために、手拍子しながら歌うとみんなが楽しくなると思う。グループでアイデアを出して協力したから素敵な歌になった。



写真8 学生の新潟甚句説明と新潟甚句の踊り体験

新潟大学音楽科の学生による歌と踊りの指導後、子供は次のような感想を記述した。

- ・ハアーと伸ばしたときに音程が変わっていました。私は、新潟甚句を萬代橋で踊ったことがあります。その時、歌は音源だったので生で聞いたことはありませんでした。でも初めて本物のような歌を聴いたので、本当はすごい歌なんだなあと思いました。附属長岡小学校と佐渡の金井小学校の交流で何が違うのかを探るのが楽しみです。
- ・学生さんが歌っているときに、伸びやかできれいな歌声ですごいと思いました。私も歌って見たら、意外と難しかったです。なぜなら揺れる音程があったからです。踊りは手の振り付けと足の動きを一緒にすると、複雑でした。音楽に合わせて踊れるように頑張りたいです。

子供は新潟甚句を鑑賞することで、これまで経験してきた歌い方との相違点を感じ取っている。そこで、新潟甚句の特徴として「声の揺れ」「合いの手」「拍」などの視点を全体で共有した。その後、グループで集まり、タブレット端末に保存した音源を聴きながら歌の練習を行った。子供は「高い声を遠くに響かせるように歌っている」「旋律の音に移り変わるところが、揺れているように聞こえる」などとグループで気付きを交流しながら何度も歌っていた。そして多くの子供が節や合いの手などを把握し、新潟甚句の1番を自分なりに歌うことができるようになった。

次に、グループで円になり新潟甚句を踊った。しかし、手足の動きがどのように関連付いているのかわからないという意見が子供から出された。そこで、You tube 動画（【公式】3分でマスター！新潟甚句の正しい踊り方）を視聴し、手足の動きについて歌を区切りながら分析した。子供は動きに名前を付けたり拍を数えたりしながらグループで練習をし、甚句の音楽に合わせて踊ることができるようになった。

附属長岡小学校での活動

第3学年「日本のおまつりの音楽に親しもう」の

題材で、地域のおまつりの音楽をはじめ、全国のおまつりの音楽に親しむ目的で、5時間の題材計画を立てた。

- 1) 日本のお祭りの音楽に親しもう
- 2) 長岡甚句について知ろう（学生との交流）
- 3) 長岡甚句を歌おう・踊ろう
- 4) 附属新潟小と金井小に長岡甚句を紹介しよう（三校合同授業）
- 5) 音楽会で全校・保護者に長岡甚句を発表しよう

導入で、日本のお祭りの音楽を紹介した。「津軽甚句」（青森県民謡）と、「越中おわら節豊年踊り」（富山県民謡）、「阿波踊り」（徳島県民謡）の映像を視聴し、以下の感想をもった。

- ・聴いているだけでわくわくして、踊りたくなる。
- ・はずんだ感じやなめらかな感じなど、リズムによって雰囲気が変わる。
- ・音楽が速いと元気な感じ、遅いとゆったりした感じがする。
- ・太鼓や笛、三味線など、使われている楽器は似ている。
- ・途中でかけ声が入って、もっと楽しくなる。
- ・歌い方が普通の歌と違う。伸ばす所がゆれている。

映像を見ると、「長岡祭りで踊った長岡甚句に似ている。」という子供がおり、長岡甚句に対する知見がほとんどない大多数の子供が「長岡甚句も聴いてみたい。」と意欲を高めてきた。そこで、新潟大学の先生（学生）が長岡甚句を教えてくださいと伝えることを伝えた。「一緒に踊りたい。楽しみ。」「自分でも調べてみたい。」と欲声があがり、長岡甚句について調べる場を設定した。クロームブックを活用し、長岡甚句の歴史や、歌詞、踊り方、唄の特徴など、調べ活動を行い、調べたことを共有した。家族で、長岡祭りで踊った写真を持参する子供もおり、大学の先生（学生）と長岡甚句について学ぶことへの意欲が一層高まった。

新潟大学の学生から、長岡甚句を学んだ後、音楽授業と朝の時間を活用し、唄と踊りの練習をした。短時間ではあったが、学生が踊っている映像を見ながら、唄と踊りを習得していった。「新潟や佐渡の仲間を紹介したい。」と、三校合同授業への意欲が高まっていった。



写真9 校内音楽会に向けた練習/音楽科掲示版3枚

三校合同授業後、「新潟甚句」「佐渡おけさ」も踊ってみたいという子供が多く、音楽授業の中で映像に合わせて他の地域の踊りを楽しんだ。三校合同授業を実施したことにより、民謡に親しみ、自分の地域だけでなく、他の地域の音楽にも興味を広げる姿が見られた。校内の音楽科の掲示版でも活動の様子を紹介した(写真9)。題材終了後の子供たちの感想は以下の通りである。

- ・長岡甚句は踊っていると楽しくて、家族にも踊りを教えた。家族で、長岡祭りで踊ってみたい。
- ・毎年長岡祭りで踊っているのので、他の学校に長岡甚句の楽しさを伝えることができ嬉しい。新潟と佐渡の踊りも、とても楽しそうで、踊ってみたい。お囃子が似ている所があってびっくりした。
- ・太鼓や笛や三味線など、長岡甚句の楽器も演奏してみたい。
- ・長岡甚句の素敵な所をもっと全国の人に伝えたいし、日本の民謡をもっと調べてみたい。

4. 大学と小学校三校のオンライン合同授業 音楽科学生の活動

大学と三校の都合の合う、7月16日に大学がホストとなり小学校三校、合計4箇所をZoomで結んで授業や活動を行った。

大学では朝から音楽棟121教室でスクリーンに映されたZoom画面を全員が見られるようにし、小スタジオ風の配置でスタンバイした。なお、カメラは複数のマイクで録った音声を取り込めるよう、音響ミキサーを通して集められた音声をプロフェッショナルビデオカメラ ソニー HXR-NX80に入力し、ビ

デオカメラの音声はHDMIビデオキャプチャー クラシックプロCHD312で変換し、パソコンのUSBに送られた(写真10)。

Zoomの画面は大学と三校の4画面のみが見られるように設定した。写真11にその様子を示す。なお、ビデオカメラとZoomの操作要員として、附属新潟小学校と附属長岡小学校には担当の学生が赴いた。授業は内容進行を表7に示す。



写真10 合同授業(大学側)



写真11 合同授業(Zoom画面)

表7 合同授業指導計画案

時間(分)	ねらい○学習内容・学習活動	予想される子どもの反応※指導上の留意点
15	◆3つの音楽について知ろう ○各学校が発表する ①自分の地域の音楽について紹介 ②唄・お囃子の披露	※現地の学生がカメラの調整を行う ※自分の学校があてられたらミュート解除
10	◆お囃子の工夫を通してお囃子の特徴を理解しよう ○3つの音楽のお囃子の確認 ○お囃子を工夫する佐渡おけさ・唄を盛り上げるためにはどうしたらよいか。	
10	◆歌い方に注目しよう ○こぶしに着目する ・2つの歌い方を比較、違いを見つける (1つ目こぶしなし、2つ目こぶしあり) ○地域の音楽からこぶしを見つける ・長岡甚句の中からこぶしを見つける	※学生が2つの歌い方を行う ※長岡甚句を取り上げる

5	<ul style="list-style-type: none"> ・見つけたら手をあげる ○こぶしをやってみる ・先生が手をくるくるしたところ でこぶしを入れる ◆歌詞は即興的につくられていた ○人々の意見が歌詞になっていた ・クイズをおこなう ○ある場面を提示し、学生が歌詞 を作って歌ってみる ・学生が劇を行う ・新潟甚句の節で唄う 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ○まとめ ・意見交換(気づいたこと、感想 など) ・学生からのメッセージ地域の 音楽を大切に 	※新潟甚句を取り上げる

新潟甚句のよさを紹介する活動を組織した。交流会当日は、新潟夏の風物詩である「新潟まつり」をイメージし、永島流新潟樽砵の演奏を入れ、さらに新潟甚句の歌と踊りを合わせて4年生全員で祭りの雰囲気を与えようとする姿が見られた(写真12上)。また、他の地域に伝わる民謡に耳を傾けながら「合の手が違うんだね」「新潟甚句はテンポが速いけれど、佐渡おけさはゆったりした感じだね」などとそれぞれの民謡を聴き比べる姿が見られた(写真12左)。さらに、新潟甚句の歌詞を変えた歌を提示すると、「マスクのことが歌詞になっている甚句は、今のことを歌っているのに昔のことに聞こえて面白い」と思わず笑みがこぼれた。

佐渡市立金井小学校の活動

オンライン環境が発達し、社会体育の活動などで島外の子供たちと交流する子供も増えてきている。しかし、多くの子供たちにとって、島外の子供たちとこのようなかたちで、活動を共にできるということは、とても貴重な経験となる。授業開始前から、Zoomで新潟・長岡の子供たちの様子が映し出されると、興味津々の様子で、発表することへの緊張と共に、楽しみなスタートとなった。

金井小学校の発表は59名で、3つの円をつくり、唄と踊り、お囃子を交替しながら発表した。練習時から、フラットシンギングが見られたが、練習を繰り返した民謡独特の節回しをうまくつたえられるように、はりきって発表した。三校の中で、最も下の学年であったが、民謡を楽しむ雰囲気は、伝えられたのではないと思う。

授業後、「新潟のいろいろな民謡が知れてよかった」「踊りが上手でびっくりした」「迫力があった」など、他校の感想を伝える児童が多かった。そんな中で、「自分たちの地域の民謡『佐渡おけさ』を遠くの人たちにも知ってもらえてよかったし、大切にしていきたい。」「『佐渡おけさ』を勉強してみて、民謡に興味が無かったけど、なんだか好きになってきた。」などと、自分たちの地域の音楽への誇りや愛着のようなものを語る児童もいた。

附属新潟小学校の活動

新潟甚句に興味をもった子供は、附属長岡小学校と佐渡市立金井小学校の友達に歌と踊りの面白さを知ってほしいと意欲を高めた。そこで、踊りグループ(4年1組)と歌グループ(4年2組)とに分け、



写真12
↑他校の子供に新潟
甚句を伝える
←他の地域に伝わる
民謡を比較聴取

そこで次の時間は、生活の中で、新潟甚句の歌詞にしたいことを話し合い「ほくらの甚句」をつくることを提案した。日本国内には、多種多様な民謡があり、それぞれに役割を持って存在している。新潟甚句に目を向けると、かつては人々が即興的に盆踊り唄の歌詞をやり取歌によるコミュニケーションを楽しんでいた。そのような文化背景から、子供が生活と関連付けた歌詞をつくり、「自分の歌詞」に思いを込めて歌唱表現を追求し学びを深めることができると考えたからである。

まず、「ほくらの甚句」はどのようなテーマで歌詞をつくりたいかについて交流させた。次に、タブレット端末上のシンギング・ツールに、そのテーマから想像する言葉を広げさせた(図1)。

成果としては、学生による新潟甚句の指導が、子供たちの興味を引き出し、もっと新潟甚句を知りたいという意欲付けに有効だった。また、新潟甚句の生演奏は、子供の郷土の音楽への憧れを醸成していた。また、実際に集うことが難しい三校と、Zoomを活用しそれぞれの地域に伝わる民謡を通して交流することができたことは画期的な取り組みだった。

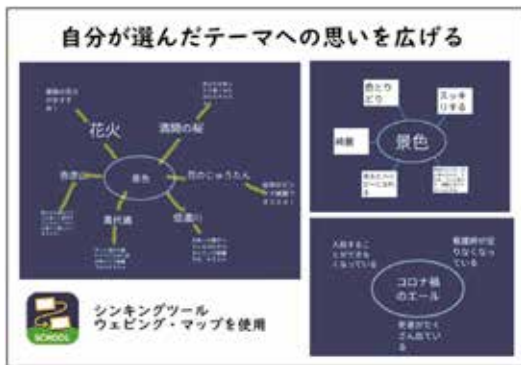


図1 「ばくらの甚句」テーマ別のウェビングマップ

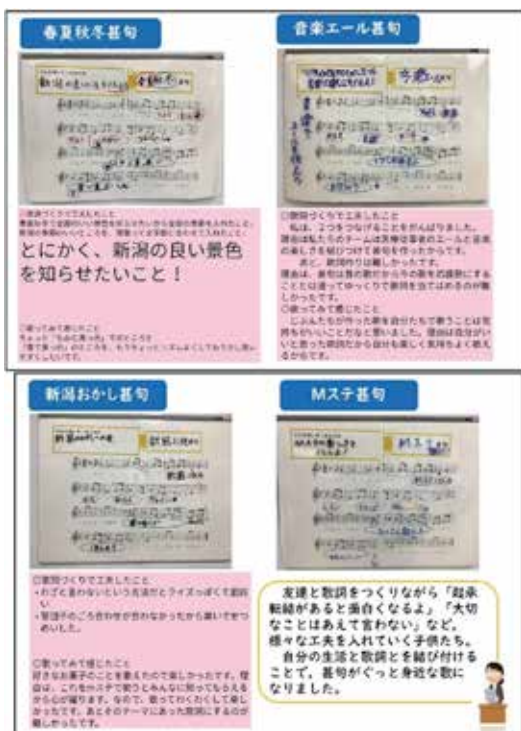


図2 音楽ボードと振り返りカード

同じ県内でありながら、合いの手や拍感に違いがあるなど、子供は比較聴取することでたくさんの気づきを得ていた。さらに学生による指導後、新潟の景色や行事などをテーマとしてグループごとに歌詞をつくる活動を組織することで、自分の思いと歌詞を結び付けることができ、新潟甚句が子供にとって身近な歌となった。

歌詞を作成後、歌い手として自分たちの歌詞に思いを込めて歌唱表現を創り上げた。対話を通して音楽表現を深め、子供にとって新しい「新潟甚句」を

創る活動へつなげることができた。

課題としては、学生の表情は画面を通して伝わってきたが、子供の反応が学生に伝わりにくかったのではないかと考える。今後もオンラインのよさを活用した授業の可能性を探ってゆきたい。

附属長岡小学校の活動

新潟大学の学生から、長岡甚句の意味や歴史、歌詞の意味を教えていただいた際、クイズ形式で楽しく学ぶことができた。自分たちも、新潟や佐渡の仲間を楽しんでもらえるように、クイズ形式で長岡甚句を紹介しようと意欲的に準備を進めた。「長岡甚句は何年前につくられたでしょう?」「歌詞にある柏の御紋の長岡藩の家紋は、3つのうちのどの模様でしょう?」画面に向かって生き生きと語りかける子供たちの姿が見られた。さらに、長岡城や悠久山の桜、長岡花火の様子も写真で発信し、長岡の魅力を伝えた。練習時から意欲的に唄ったり、踊ったりしていた子供たちであったが、他校の仲間や学生に向けて、いつも以上に全身で伝えようとする意欲に溢れていた。新潟甚句、佐渡おけさの発表を聴きながら、たくさんの子供が一緒に体を動かして踊っていた。学生による、お囃子の共通点や相違点を学び、他の地域のお囃子を口ずさみ、地域に根付いた音楽に親しむ姿が見られた。



写真13 クイズ形式で紹介／発表の様子

三校合同授業が終了すると、「もっとたくさんの人に紹介したい。」「全校の前でも踊りたい。」と意欲を高めてきた。そこで、校内音楽会で発表する場を設定した。全員が自信をもって唄ったり、踊ったりし、長岡甚句の学びを生き生きと発信したいという意欲に溢れていた。長岡市の民謡に愛着をもち、学びを発信する力が高まった。

日本の民謡と三校合同授業を関連付けた題材を構成したことにより、自分の地域に根付いた音楽に愛着をもつと共に、他の地域に根付いた音楽にも親しみ、関心を高めることにつながった。さらに、学生との交流や、他校の仲間との交流により、人とかわる力、伝える力、相手意識をもち全身で表現する力が高まった。校内音楽会の発表につながったことは、

交流授業を実施した第3学年にとどまらず、保護者や全校が地域の音楽に親しむ機会となり、附属長岡小学校全体にとって価値ある活動となった。

5. 学生自身の自己評価

活動後に提出された学生のレポートで高く評価されていた点は、三校合同授業による、子供たちの地域の音楽への理解であった。子供たちが自身の地域の伝統音楽について理解、実践したことを合同で発表し合うことで、お互いの良さを知ることができ、自身の地域の音楽をさらに深く理解できたことを、ほとんどの学生が高く評価しており、授業のねらいが達成できたことを示している。これはZoomによるリモート授業によって、遠く離れている三校と大学を結んで、授業を行うことができたことで可能になったことであり、リモート授業について今後も様々な可能性を秘めていることを確認できた事項である。

次に多くの学生が触れていた点は、子供たちとのコミュニケーションについての問題点であった。リモートで授業を行なったことは、対面で授業するのとは別の視点から大切な気づきを得ることができたようである。リモートでは、どんなことに気をつけて問いかけや説明を行えば良いか、対面で行うよりも子供に寄り添って想像力を働かせて深く考えなければならず、対面で行うよりもきめ細やかにコミュニケーションを取る必要がある。大学生自身はリモート授業に慣れているが、大学生向けのリモートと小学生向けでは自ずと方法が変わってくる。大学生は実体験からリモートの便利さや有利な面については良くわかっているが、大学生よりも集中力が続かない子供たちに対しては、かなりの工夫が必要となってくる。佐渡市立金井小学校を担当したグループは、事前の授業と合同授業の両方もがリモート授業であった。1回目はパワーポイントに頼りがちになったため、子供たちがテレビを見ているような雰囲気になってしまい、授業者と子供たちの間に距離ができてしまった。しかし、2回目の合同授業では授業者の顔を前面に出して、簡潔な言葉でやりとりをしたり、目線を工夫することで、子供たちとの距離を縮めることができたという報告があった。子供の目線に立って授業を行うことは、対面で授業をする時にも非常に重要な点で、これらのことをリモート授業によって、客観的にしっかりと気づくことができたのではないだろうか。他の2校を担当した学生は、事前授業は対面で、合同授業のみがリモ

ート授業であった。対面の授業では子供たちの反応を受け止めて次の行動に繋げられるが、リモートではそこが難しくなったことが報告されている。対面、リモートの2種類で授業を行なったことで、子供たちとのコミュニケーションについてさらに深く考察し、どのように子供たちと接すれば良いかという、今後の進むべき方向を見定めることができたようである。

学生同士のコミュニケーションについても多くの意見があった。3年生がリーダーとして全ての授業を組み立てていったため、最後の合同授業の達成目標と、各校での事前授業がどのように結びついていくのか、1・2年生にしっかりと伝えきれていなかったため、活動が混乱したり、遅れてしまったりしたことがあった。相手の立場を想像して、どのように伝えれば目標を共有できるか、また受け取る側も何がわからないのかを自覚して、相手にそのことを伝えないと、お互いにすれ違ったまま活動することになり、無駄な時間を過ごすことになってしまう。どちらも自分自身を中心に考えるのではなく、活動の重要なポイントをしっかりと把握した上で、相手の立場に立って考えてみることで解決していくことではないだろうか。最終的には現場の教員や、子供たちの力によって乗り越えることができたが、本来は授業の計画者、実施者がしっかりと責任を持って進めていかなければならない。これらは、数ヶ月から1年近くをかけて準備した学生たち自身が、その過程において身をもって感じ、気づいたことではないだろうか。

6. 今後に向けて

学生たちは、それぞれの学校に1時間目の授業を行い、次いで三校合同の授業を行った。授業を通して彼らは子どもたちの上達を目の当たりにした。この論文を執筆中も附属長岡小学校では、発表会に向けて子供たちが長岡甚句に取り組んでおり、どんどん上達していると連絡が入っている。いろいろ制限がある中、一定の成果は出せたと考えている。今回の試みは、COVID-19禍において「何としても前に進もう」という気持ちから生まれたものであるが、デメリットばかりでなくメリットも実感することができた。

現在、ICTの利用が叫ばれているが、こういった活動が結果的にICTの利用を促進することが考えられる。こういった活動に、今後も積極的に取り組んでいきたい。

なお、使用した写真は写った人の承諾を得て使用しています。

また、関係諸氏には、この場を借りて御礼申し上げます。